

『自讃歌注 孝範注』

近時、延岡内藤家旧蔵『自讃歌注 孝範注』(一五二―四二〇)が当部に収められた。該書は、その存在自体は『国書総目録』で早くより知られていたが、詳細を明らかにし得なかつたものである。今回の整理に伴い、ここに若干の報告と翻字をもつて紹介をしたい。

『自讃歌』は、序文によれば後鳥羽院が定家ら当時の代表歌人十六名に各々の自讃の十首を奉らせた秀歌撰であるが、実際は院に仮託された書物であり、その『自讃歌』の注釈がすなわち自讃歌注である。頼阿・兼良など個人の名を冠した注があり、宗祇注は版本にもなり広く普及した。該書は木戸孝範(一四三四―一五〇二以後)による注である。孝範注は三手文庫本が『自讃歌古注十種集成』⁽¹⁾に翻刻され、平成五年には研究誌『自讃歌注研究会誌』⁽²⁾が発行されるなど、注目を寄せられている。

一、書誌と旧蔵者

内容に言及する前に、書誌的な側面を確認しておく。

- 書型 列帖装 縦二三・五種×横一六・四種 一冊
- 表紙 紺地紙表紙(改装)
- 丁数 墨付 七二丁、遊紙 前後各一丁

料紙 楮紙(打紙加工)、虫損有。

行数等 一面一行二六字前後、和歌一首一行書き、注二字下げ

書入 朱鈎点有。

奥書 (後述)

書写年 永正十五年 慈運法親王御筆(後述)

備考 奥書の後に青貼紙「竹内御門跡／慈運御筆」、表紙に貼紙「御手許蔵書／第三十八号／新第八〇四号」とあり。⁽³⁾

裏見返しに別筆で「竹内御門主慈運真跡」とあり。

印無。

※附一通(懷紙折紙、三二・七種×四五・九種、極状「自讃歌／東久世三位博高御筆／外題／右同筆」、包紙一枚⁽³⁾)

奥書は次の通りである。

此一帖依或人之懇望難點止不願後勘之
嘲哂所加僻案之調也特亦凌嚴寒之間鳥
篆比興之旁不可及外見者也

文明八年丙辰臘廿五日

諫議中郎將藤原朝臣 判

永正十五年仲夏上旬之候依小童之

御所望不願惡筆染禿毫訖

竹裏老翁（花押）

延岡内藤家の文書類のうち、藩政資料は一括して明治大学附属刑事博物館の所蔵となり、「内藤家文書目録」（昭和四〇年、明治大学図書館）が出版され、その伝来および経緯は白井信義氏「延岡内藤家と其史料」に詳しい。和歌文学の側面より内藤家を捉えたと後水尾天皇批点の家集「左京大夫集」（内閣文庫蔵）を有し、堂上と関係の深い内藤風虎（義泰）がまず挙げられるが、その蔵書印である「牘庫」印はない。風虎以降の所蔵にかかると考えるのが穏当であろう。

二、書写者

書写奥書と極状で時代の大きく離れる書写者であるが、該書の料紙は室町時代のものとして推定されること、当部蔵博高写「狭衣物語」（五〇〇―六三）と比較し、東久世博高（万治二・六完生）の書写ではないと判断できる。

次に永正十五年の「竹裏老翁」であるが、竹内門跡たる慈運法親王が相当しよう。慈運法親王に関しては、短冊が残されている⁵⁾。後柏原院流の書風は

該書にも通じ、「待」「夜」など同一の特徴を備えており、書風から慈運法親王を否定する要因は見られない。

慈運法親王は、文正元年（四四六）に伏見宮貞常親王の王子として誕生した。母は庭田重有女盈子。後土御門天皇の猶子となり、文明十年（四七六）に曼殊院良鎮のもとに入室、同十六年に得度、始め良嚴、後に慈運と改める。文龜元年に曼殊院門跡となり、天文二年に法性寺座主、同六年（五三七）に薨じた。書写年次である永正十五年（五二八）には五十三歳となる。「門跡伝」にも「本名良嚴、伏見殿貞常親王息母贈一品重有女、後土御門御猶子、天文六六廿九寂、号松牧子、明曆四公宴書ニ竹内宮ト有之」とある。また「お湯殿の上の日記」⁶⁾ 明応六年十月二十日条では「二宮の御かた、たけの内とも御まゐりありて、みやうかう御れん哥御さたあり」とあり、「公宴統歌」では永正元年以降天文三年まで禁裏月次和歌御会などに出詠し、「元長卿記」永正十年二月二十六日条では「於竹内宮有御連歌、発句主人御詠也」同四月十一日条では「於竹内宮有御連歌、鹿苑院御発句」と自ら連歌会を催している。歌学書を書写しうる環境であることは言うまでもない。これらを勘案するに、該書の書写者は奥書通り慈運法親王と見てよいであろう。

三、伝本と内容

孝範注の伝本に関しては、石川常彦氏「月花集拾遺」⁷⁾ 解題に詳しく、赤瀬信吾氏の論や、最近では三浦俊介氏の言及がある。それに拠りながら、該書を位置づけてみたい。

孝範注のうち早い時期の奥書を有するものとして、大東急記念文庫蔵本と龍谷大学蔵本・内山逸峰自筆本が挙げられる。特に逸峰本の奥書は「此一

帖」〔藤原朝臣〕まで該書と一致する。(但し、内山逸峰は江戸時代中期の人で一七八〇年に没する⁽⁸⁾)

【大東急記念文庫蔵本 四一―一八一―三〇三五】内題「自讚歌注釈」

奥書「此一冊藤原孝範於關東東⁽⁷⁾注釈之云々／以偃月老人本令書寫畢／明応式年菊月既望」

【龍谷大学蔵本 〇二―一三五七―一】内題「自讚哥注」

奥書「此一本雖為秘本依所望書寫了／于時明応五年二月八日」

ほかに、冷泉家時雨亭文庫蔵本が明応七年頃の可能性を有している⁽⁹⁾。

木戸孝範が關東に居た長祿元年(四三三) 〔明応二年(四三三) までの間に成立し、偃月老人・河内入道宗高所持本を明応二年に書寫し、その転写本が大東急文庫本であると位置づけられたのが井上宗雄氏⁽¹⁰⁾である。該書の奥書は本奥書が文明八年(四三六)、孝範が三十四歳のこととなる。該書および逸峰本、大東急記念文庫・龍谷大学・冷泉家本は孝範生存中の(本)奥書を有することになる。

そこで、紙幅の都合で後鳥羽院の部分のみ翻刻し、上記四本と早く活字になつていた三手文庫本の校異を示した。但し、冷泉家本は未公開の為、その忠実な写しとされる靈元院宸筆本(書陵部蔵、特一八五内題「自讚哥傳」⁽¹¹⁾)を用いた。すると、龍谷大学本との接近が見られ、同じ奥書を持つ逸峰自筆本との差が明らかになった。なお、三浦氏が指摘する龍谷大学蔵本に見られる独自の脱文のうち、目移りなどのケアレミスと推測される五七番歌(通具・冬の夜の)および一一九番歌(家隆・和歌浦や)の脱文は生じていないものの、一四六番歌(寂蓮・老の波)では、同じ部分が欠如していることを付け加えておきたい(逸峰本には有)。これによつても、奥書と伝本系統が

直線的に結びつくものでないことは明らかであろう。

なお、該書と逸峰本に見られる文明八年の「諫議中郎將藤原朝臣」つまり参議で中将を兼ねている藤原氏は、左中将四辻季経と右中将正親町公兼の二人である。歌歴などからは四辻季経のほうが相応しいかとも思われるが、積極的な案を持たない。なお、別の当部蔵孝範注(鷹一四六六「自讚和歌註」)の天文十三年の「諫議中郎將藤原朝臣」は、時期が違うのでひとまず置いておきたい。

以上不明な点も多いが、孝範没年にほど近い、書写年次の早い該書は孝範注、自讚歌注の研究に益のあるものと考え、紹介した次第である。

〔注〕

(1) 黒川昌享・王淑英氏編、桜楓社、昭和六二年。

(2) 自讚歌孝範注輪読会(平成五年一月) 〔「自讚歌孝範注」輪読〕(一)

〔五〕は「中世文芸論稿」一二―一六号、平成元年三月―平成五年三月に収載。

(六) 以降、「自讚歌注研究会会誌」にて掲載。

(3) 他に表紙等に内藤家のラベルがあるが、省略する。

(4) 「駿台史学」一四号、昭和三十九年三月

(5) 「日本書蹟大鑑」小松茂美氏編、講談社、昭和五三―五五年

(6) 「お湯殿の上の日記」続群書類従完成会、昭和三二年・「公宴統歌」公宴統歌研究会編、和泉書院、平成二年・「元長卿記」続群書類従完成会、昭和四八年

(7) 「月花集拾遺」和泉書院、昭和五六年・赤瀬信吾氏「木戸孝範「自讚歌注」の分岐」(国語国文、五十五巻十号、昭和六一年十月)・三浦俊介氏「自讚歌孝範注伝本考」(二)〔「自讚歌注研究会会誌」平成二三年十月〕

(8) 大東急記念文庫蔵本は未見の為、注1の校異を用いた。龍谷大学蔵本は注

2の翻刻を用いた。三手文庫本（内題「自讃哥」）は国文学研究資料館の紙焼

写真を用い、内山逸峰自筆本（内題「自讃歌」）に関しては「近世越中 和歌・

連歌作者とその周辺」（綿拔豊昭氏著、桂書房、平成九年）の翻刻を用いた。

(9) 注7の三浦氏の御論による。

(10) 「大東急記念文庫蔵 自讃歌注釈・和歌十躰（毎月抄）について」（かがみ、
一、二号、昭和四三年三月）

(11) 注6の三浦氏の御論による。

自讃哥注

女房^① 後鳥羽院

桜さく遠山鳥のしたりおのなかくし日もあかぬ色かな

(一)

〔凡例〕

一、字体は特殊なものを除き、常用字体を用いた。

一、本文中に適宜読点を、歌末に歌番号を漢数字で付した。

一、「丁末に」と丁数を付した。

一、校異に用いた略称は次の通り。

龍：龍谷大学蔵本、三：三手文庫蔵本、大：大東急記念文庫蔵本、

霊：書陵部蔵霊元天皇宸筆本、逸：内山逸峰自筆本

(杉本まゆ子)

是は俊成卿に九十の賀を和哥所にて給
し時、屏風のゑに、遠山には花さきたる
ところをあそはされける御製也、此賀
の事、仁和の御時は僧正遍昭に七十の
賀を給ける例と云々、人丸の哥に、足引
の山鳥のおのしたりおのなかくしよ
をひとりかもねんといへる本哥とさゝれた
り、さくらさく遠山とをかれたるわたりか
すめるほとをこめて遠望の興、比類な
くそみえ給る、しかあるを花はちかきよりも
ほとあるそおもしろき、さてもかやうにあそは
されけると申人はへるとかや、このこといか
にそや、遠近をたくらへたる御哥にはあら
す、遠景を題とせられたれはにこそはへれ、

その題にあたりてその物をしやうするはつ
ねの事にや、なか／＼し日もあかぬ色かな^⑮
千秋万歳もと叡慮のおもむきかたしけ」(一)
なくもはへるかな

露は袖に物おもふころはさそなをくかならず秋のならひな
らねと(二)

①此御製は、秋のならひはかりに袖のぬれは
③こゝろあさかるへし、物のあはれしれる袖には
⑤いつも露そをきけるとにや、されは秋なら
⑦ぬ時たにも心つからの露也、殊節物のあ
はれをそへては袖のうへかはくまもあるへからず、
⑨感情しこくしてこそ覚えはへれ

わか恋は楨の下葉にもる時雨ぬるとも袖の色に出めや(三)
忍恋の心をとあり、此御哥をたとひぬるゝ
③とも色には出しと心えはへるは心あさくや、楨^⑥
のしけりはてたる深山のほとりうち時雨で、
下葉にもる歎もらぬかのしつくぬるゝもぬれ^⑩
さるも見わくほとやあらん、其ことくに、とも
すれば涙もよほすおり／＼はありともぬるゝは^⑭

かりも袖の色にはみせしと也、此色はくなれる^⑯
なにてはあらず、たゝぬるゝを色とあそはされ^⑰
たるなるへし

袖の露もあらぬ色にそ消かへるうつれはかはる歎せしまに
(四)

①被忘恋の心をとあり、心は境に転せらるゝ物」(2)
にや、おもひそめしはかりの時はつねの涙にて、
人の心のうつりかはり行にしたかひて、こなた
のおもひもあらぬうらみとなり、こゝろのもよ
ほす物にて涙も又紅に成らん事、肝心にそみ^⑳
みてこそ侍れ、消かへるとはもとの露は消て又^㉑
をく心なるへし

大空に契るおもひの年もへぬ月日もうけよ行末の空(五)
②大空にちきるおもひとはいかさまなとゝいひすて
たる心也、かやうに治定もせぬ人のことのはを^④
もせめてのたのみとして年もへたるにや、その「
大空をまことの空にとりなして、空にはこと^⑥
物なし、なにゝかいのるへき、月日あはれみをたれ^⑦
ておもふ事かなへ給へとなるへし、此御製ことに^⑩

凡慮の^⑫をよひ侍らむ所にあらず、猶和哥の^⑬
秘伝あるへし

みるまゝに山風あらく時雨めり都もいまや夜さむ成らん

(六)

是は熊野御幸の御時、旅の心とあり、みる

まゝに^①とはななかむるうちに次第^②に昨日より

今日はなを山風のあらく時雨行体也、旅行

のならひ何事につけても古郷のおもひ^③ (3)

いらるゝにや山風のあらし夕暮、都の空お

ほしめし出られけむ、夜寒なるらむの御句

に撫民の御心もこもりてや侍らむ^④

おもひいつる折たく柴の夕煙むせふもうれしわすれかたみ

に (七)

なき人のおもかけおもひ出ていひもやられ

ぬあはれはたゝ折たく柴のもえわひてむせ^①

ふ煙のことく成へし、わすれかたみとは忘れかた

しといへるつゝき也^②

なき人のかたみの雲やしほるらん夕の雨に色はみえねと

(八)

われも人も亡執のみ也、なき人のかたみの雲や^②

わか袖ぬらせとしほるらむ、我も又其人を思^③

てこそ千万行の涙もかきくらしぬれは両方^④

をとり合てあそはされたるにや夕の雨に色は^⑤

みえねと、たとひ心はうるとも詞やわすれ侍らん^⑥

なかめはや神路の山に雲消て夕の空にいてむ月影 (九)

大神宮へたてまつられける御哥の中にと有、^①

詠はやとは神宮御幸なとも申事ありかた^②

きによりてはるかにあふき給心也、いつくも^③

月はさやけき光ながら、ことに神路山の夕

の空にいてん、天岩戸をしひらかれし昔 (4)

も今のこゝちしてさそ情感のあらむとあそ^④

はされたるにや、いてんといへるを行すゑにやる人^⑤

はいかにそやしみて行人をとゝめむ桜花いつ^⑥

れを道とまとふまでちれといへるも当座の事也^⑦

瑞籬や我世のはしめ契をきしそのことのはを神やうけけん^⑧

(一〇)

此瑞籬やとをかれたる五文字を心意識の

中意と尺して申人あるにや、先達の心^⑨

にもさのみ哥道をいりくり心えはへるを信用^⑦
 せざるにや、瑞籬とは久しきといへる枕詞也、久
 しき神代といへる事を、みつかきや我世の「
 はしめとはをかれたる成へし、天照御神は君と
 さたまり給、天小屋根の尊は臣と成給て、蘆
 原の中津国を治め行くへき御契、両神御納
 受の末、いまに絶せず君臣あひ逢て天下
 国家をひとしくし給と世をほめ神にさとし^⑪
 給御製とや申さむ、されは後京極摂政、公卿^⑫
 勅使にてまいり給て、神風やみもすそ河のその
 かみにちきりし事のすゑをたかふなとよみ給け^⑬
 り、けにもいく万代もとめてたく覚侍り^⑭

〔校異〕

【一、桜さく】①女房後鳥羽院…女房 後鳥羽院 (龍) 女房 高倉院第四皇子御母從三位修理大夫伯隆女
 (大) 後鳥羽院 (三) 女房 (靈) 女房 コトハノ院高倉院第四 (逸) ②屏
 風のゑに…屏風に (三) ③遠山には…遠山に (龍三靈逸) ④花さきたる…
 桜書たる (三) 桜開きたる (大) ⑤あそはされける…あそはしける (三靈
 逸) ⑥仁和の…仁和の御門の (大) ⑦御時は…御時 (龍三靈逸) ⑧給け
 る…給し (三) ⑨おのゝこめて…御歌を本歌と遊はされたり。五文字は遠
 方のかすめる体をこめて (逸) ⑩いへる…いへるを (龍三大靈) ⑪さゝれ

…せられ (龍三大靈) ⑫とをかれたるわたり…とは打 (三) とをかれたる
 わたりうち (大) とをかれたるわたりをち (靈) ⑬ほと…体 (龍三大靈)
 ⑭遠望の…遠山は (靈) ⑮給る…給ふ (逸) ⑯あるそ…有か (三) ⑰お
 もしろき…面白く見ゆ (逸) ⑱さても…さては (龍) さてそ (龍三大靈)
 扱社 (逸) ⑲に…には (三) ⑳あそはされけると…あそはされたる由
 (三) 遊はしけると (逸) ㉑申人はへると…ナシ (靈) 申人有と (逸) ㉒
 このこと…此事は (三) 夫は (逸) ㉓いかにそや…いかそや覚え侍る (三)
 如何とや (大) ㉔遠近を…遠近 (靈) ㉕たくらへ…くらへ (三) ㉖あら
 す…あるへからず (三) ㉗題とくはへれ…題とせられたれはにこそへたる
 御哥にはあらず侍れ遠景を題とせられたれはにこそ侍れ (大) ㉘せられた
 れはに…せられたるに (三) し給ひたれは (逸) ㉙しやうする…賞玩する
 事 (逸) ㉚にや…也 (逸) ㉛かな…とは (三) ㉜もと…との御 (逸) ㉝
 かたしけなくもはへるかな…忝侍哉 (大靈) もかたしけなくも侍る哉 (三)
 忝聞え奉るにこそ (逸)

【二、露は袖に】①此御製は…是 (靈) ②は…侍らは (三大靈逸) ③こゝ
 ろあさかるへし…あさかるへし (三) 心浅かるへき (逸) ④しれる…を思
 ひしる (逸) ⑤露そをきけるとにや…露をきけるとかや (三) 露そをきけ
 る (靈) ⑥されは…ナシ (靈) ⑦たにも…も (三) ⑧殊飾物のあはれを
 そへては…ことに節物の哀をそへて (三) ナシ (靈) ⑨しくくしてこそ覚
 えはへれ…至極せり (靈)

【三、わか恋は】①御哥を…御哥は (三) 御歌の心 (逸) ②ぬるゝ…ぬる
 (大) ③色には出し…色に出し (靈) 色には出さし (逸) ④はへる…ぬる

(逸) ⑤心…ナシ(三) ⑥槇のしけりはてたる…槇のはしけりはてたる
 (龍) 槇しけりたる(三逸) 真木しけりはてたる(大靈) ⑦うち…ナシ
 (龍) ⑧しつく…筆にて(逸) ⑨ぬるゝもぬれさるも…ぬるゝともぬれさ
 るとも(三逸) ぬるゝもぬれぬも(靈) ぬるゝともぬれぬとも(逸) ⑩見
 わくほと…見分ぬ程(三) 見わく体(大) 見分る程(逸) ⑪に…ナシ(三)
 ⑫涙もよほす…涙もこほす(大) ⑬おりくは…おりく(靈逸) ⑭はか
 り…とはかり(龍三靈逸) ⑮みせし…出さし(逸) ⑯くなれる…紅(他
 本) ⑰と…とは(逸)

【四、袖の露も】①被忘恋の…被忘恋と云(三) ②あらぬ…あらず(逸)
 ③にて…とて(三) ④成らん…なる(大靈逸) ⑤肝心にそみみてこそ侍れ
 …肝心にそしみえこそ侍れ(龍) 心肝にしてみてこそ侍れ(大) 肝にしてみて侍
 る(三) 肝心にてこそ侍れ(靈逸) ⑥露…露は(靈) ⑦心…ナシ(三) 比
 (靈)

【五、大空に】①空…雲(三逸) ②大空に…契恋の心也大空に(逸) ③い
 かさま…いかさまに(龍) ④せめてのたのみとして…せめてたのみとして
 (龍) 頼て(三) せめての契として(靈逸) ⑤年も…年を(三靈) 「くとり
 なして」マデナシ(逸) ⑥こと物…ことなる物(三) ⑦なにゝか…何とか
 (大) 何か(逸) ⑧あはれみをたれて…あはれひて(三) もあはれのみをた
 れて(靈) ⑨事…事を(三逸) ⑩給へと…給へと(心逸) ⑪此御製こ
 とに…ナシ(靈) ⑫をよひ侍らむ所…及所(三) 及ぶべき事(靈) ⑬猶…
 へし…ナシ(靈) ⑭あるへし…なるへし(大) なるへし或註に大空とはう
 はの空なるやうのこゝの也(逸)

【六、みるまゝに】①にとはなかむる…とはなかめをる(逸) ②山風の…山
 風(三) ③体…程(逸) ④いらるゝにや…出らるゝにや(龍大逸) 出られ
 侍るにや(三) 出であるにや(靈) ⑤山風の…山風(三逸) ⑥空…空を
 (三) ⑦出られ…しられ(靈) ⑧けむ…けるにや(三) 給ひけるにや(逸)
 ⑨句に…句(靈) ⑩や侍らむ…侍らんかし(三) そありける(靈)

【七、おもひいつる】①あはれはたゝ…あはれたゝ(龍大) 哀れさは只
 (逸) ②むせふ…結ふ(三逸) ③いへるつゝき也…なり(三) いへるつら
 き心也(靈) いへる心の懸合せ成へし、或註に云、後の御愁傷のたへかたさ
 のあまりに此御製を慈鎮の許へ遣し給ひければ御返し、思ひ出る折たく柴と
 聞からに類ひしられぬ夕煙哉、此後は通光脚の妹なるよし(逸)

【八、なき人の】①しほるらん…時雨らん(三龍) ②われも…同部に有、心
 は我も(逸) ③亡執…忘執(三靈) 妄執(大逸) ④しほるらむ…しほるゝ
 は(龍) しくるらん(三) おほるらん(靈) ⑤其人…人(大) ⑥は…と
 (龍三靈逸) ⑦あそはされたるにや…ナシ(靈) ⑧夕の侍らん…ナシ
 (三) ⑨や…やは(逸)

【九、なかめはや】①にと…に(三) ②なとも…なとゝ(三大靈逸) ③あ
 りかたき…遊はしかたき事なる(逸) ④心也いつくも…心ありいつも(三)
 ⑤天岩戸…今の…岩戸を押し開き給し昔の(三) 天岩戸をし開き給ひしむかし
 も今の(逸) ⑥さそゝ事也…感情のあるらんと也(三) ⑦情感…清感
 (逸) ⑧いへる…いふ(逸) ⑨やる人は…やる人(大) 見る人は(逸) ⑩
 そや…そやと覚る(逸) ⑪とゝ事也…ナシ(靈) ⑫いへる…よめる(逸)

【一〇、瑞籬や】①うけけん…かけけん(龍) ②とをかれたる…との(三)

と置給ひたる(逸) ③にや…とかや(逸) ④先達く(にや…ナシ(三) ⑤
心にもさ…心さし(龍) ⑥をいりくり…いりくり(龍)をまりくり(大)
⑦を…をは(龍靈逸) ⑧成へし天照御神…へし天照太神(三)へし天照御
神(大靈)成へし天照太神(逸) ⑨国を…国と(三) ⑩行くへき…給ふへ
き(龍靈逸) ⑪さとし…沙汰し(逸) ⑫とや…と(大三) ⑬摂政…摂政
殿(靈)殿(逸) ⑭するを…するも(三靈) ⑮給けりけにも…給たりけに
(三)給たりけるにも(大)給けりけるにや(靈)給けるにも(逸) ⑯万代
もと…万歳も(三) ⑰侍り…侍る(逸)